孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

天馬　龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

【Ｎコード】
Ｎ２１８４Ｗ

【作者名】
天馬　龍星

【あらすじ】
二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。そして東京は七区に分け割れた。

第０話　完全無欠自己中オタク登場（前書き）

はじめまして、天馬龍星です。

何かごちゃごちゃしてきたので、最初から書きなおすことにしました。

より面白く、読みやすいものを書きたいと思っていますので、最後までお付き合いくださると嬉しいです。

第0話　完全無欠自己中オタク登場

「この子の名前は、翼（つばさ）にしようと思ういます、意味は可能性。この子には自由に生きてほしいんです？　あなたはそれですか」
「ああ、俺も気に入った。だからあまり無理に力を使うな。俺が必ず運命を変えてやる。この子のためにもな」
「やっぱり、あなたは優しいわ。でもこれは私にしかできないことだから……もう少しだけ、無理をさせてお願い」
「わかったよ、どうせ止めても無駄ならろう。なら、好きにすればいいさ」
「ありがとう。もし私が死ぬことになっても、私が見たことは未来のことは誰にも話さないでください」
「わかった、誰にも言わない。大丈夫、俺とお前の子供だ！　どんな過酷な未来が待っていようと決して負けないさ、乗り越えて行けるはずだ」

またこの夢か？　最近よく見るようになった不思議な夢。
校長の話しがつまらなくて眠ってしまったようだ。
椅子から立ち上がり伸びしてから、出口に向かって歩いていると
「昨日の魔法少女シリアみたか？」
「見た見た、今回も萌え萌えな展開で、ドキドキしたぜ」
黒髪のひょろい男が、眼鏡をかけたオタクぽい男性に声をかける。オタクぽい男性は満面の笑みを浮かべて楽しそうに答える。
二人とも紺のブレザーを着たここの生徒で、興味深い話し声が聞こえてきたので足を止めて耳を傾けてしまう。
「蒼髪にロングヘアとか、最高に萌えるよな」
「ああ、あの風で髪が靡く所がチャーミングだよな。あのネコみたいに甘い声も萌えちゃうよ」
「なかなか、お前わかってるじゃないか？　ミニスカ、黒ニーソが

また痺れるんだよな」
「そうそう、あの絶対領域は堪らんな。しかもあの上品そうな白いブーツの破壊力は萌え死ぬほどだ」
「その気持ちわかるぜ。やっぱお前とは話が合いそうだな」
彼らが話しているは今話題の萌えアニメである。
ここ東京では絶大な人気を誇っており、数多くのグッズ発売されている。
また、いたるところでポスターや看板を目にする。シリアグッズ専門店やシリア喫茶まで、できる始末だ。俺の名前は天海翼（てんかいつばさ）、魔法少女シリアの大ファンにして筋金入りの二次元信者。リアルな女などに興味はない。シリアちゃん一筋で生きてきている。その熱の入れようは世界一だと自負している。萌え都市として栄えている東京すら、俺の居場所は無く異端視されろほどの完全無欠自己中オタクなのだ。
幼女好き変態などと罵倒されるわ。女子には人気がなく軽蔑の視線が向けられ、男子もウザイと言われる始末だ。
二人の会話はヒートアップしていて、思わず声を発してしまった。後ろから二人の間に割り込み感じで思い切り叫んでしまった。
「貧乳って最高だよね、何か禁断の果実みたいで。特に幼女は素晴らしいよ」
「なんだ、コイツは俺達の会話に勝手に入ってきやがって。なんて空気の読めない、自己中な男だ、信じられん」
いらだった顔つきのひょろい男が、腹部めがけて大振りなパンチが飛んでくる。完全に頭にきているようだ。目が血ばしているが、ひるむことなくその拳をかわし、蹴りをくりだす。腹を五センチほどめりこませ、くの字がったになって腹を抱えて、顔を歪めながらその場に倒れ込んだ。
「この傍若無人態度に、よれよれのダイサイ制服。ミスターヘータイーーーー」
無言で思い切り殴りつけ、空中を三回転くらして壁にぶつかり倒れ

たのを確認して、辺りに睨みを効かせ黙らせている途中で視界が暗くなり、力が入らずその場に倒れた。一瞬何が起こったのか、わからなかったが。
「おい、やり過ぎだよボケ。死人がでるだろう、少しは手加減しろよな」
この一言を聞いてすぐに何をされたのか、わかった。
「貴様、また変な薬をうちやがったな。このマッドサイエンティストめ」
「人聞きの悪いこと言うな、ただの興奮を抑える薬で人体に害はないはずだ」
（絶対ウソだ、コイツがそんな普通そうな薬を作るわけがない。俺は騙されぞ）
マッドサイエンティストの登場で周囲のざわめきが大きくなる、みんな彼を恐れているのだ。萌えで栄えている場所に住みながらの萌え嫌いと言うか、オタク嫌いのイカレタ男を――――沈黙の空気を打ち破るように誰かが叫び出した。
「白衣を靡かせているあのイケメンは、火竜焔（かりゅうほむら）。この錬金術の時代でもなお科学を貫き通す姿勢を変えない、もう一人の異端児」
二〇一二年、科学万能の時代は終わりを告げる。相次ぐ環境問題さらされ、その被害は甚大（じんだい）で、日本の国民、いや、全世界において疲弊しきっていた。
しかし科学者達は解決策も講じることができなかったのに対し、教会の対応は迅速かつ完璧なものだった。国民の支持された教会は実権を、信仰学の義務化と環境に悪影響を及ぼす科学技術の廃止を推し進め、法律として認められ、全日本国民適応されて、全国の学校では信仰学の義務教育が行なわれるようになった。
科学が異端の学問になり、いつしか、マッドサイエンティストと呼ばれるようになった。科学者たちは、信仰学者と名前を変えることを余儀なくされた。
信仰学とはアルネシア神を信仰し、神の力の使い方を学ぶもので

ある。
日本国民よって、信仰学は細分化され、次々新しい分野が開拓され、日常生活に溶け込んでいた。そして東京に浸透した信仰学は、萌えという感情を信仰する学問と好奇心を信仰する学問に別れた。
「よくもやりやがったな。貴様こそ俺を殺し気か、変な薬をうちやがって」
薬の効果も切れ、立ち上がると同時に啖呵(たんか)をきる。
「なんだやる気か。いいぜ、お前との因縁にもそろそも終わらせたいと思ってたんだよ」
「ヤ、ヤバイぞ！　奴等またここで死闘を繰り広げるつもりだ。逃げるぞ、巻き込まれたらそれこそ死ぬよ。俺は逃げるからな、お前らも早く逃げたほうがいいぞ」
そう叫びながら、腹を抱えてひょろい男は体育館から姿を消した。もう一人男は倒れたまま動こうとしない。そして焔に殴りかかろうとしたら、担任の樋口(ひぐち)が割って入ってきた。誰かが先生を呼びに行ったのだろう、全く余計なことをしやがって。
「また、お前たちか。毎日毎日問題を起しおって、馬鹿者どもが。冬休み返上で学校に来い。その腐った性根を叩き直してやる」
「待ってください、先生。俺達はケンカなんかしていません。終業式も終わったし教室にカバン取りに行こうぜ、と声をかけただけです、なあ、つばさ」
「親友とケンカするわけないじゃないですか。ボク達はカバンを取りに教室に戻るので失礼します」
「おい、待って話しはまだ終わってないぞ」
樋口が何かを叫んでいるようだが、気にしない。体育館にたくさんの生徒が残っており、みんな楽しそうに友達と話している。所々で小競り合いを起こしているので、その対応に追われているため簡単に体育館を抜け出すことができった。
（どうやら、俺はコミュニケーション能力がゼロらしい。よく話しかけても無視されるし、さっきみたいにうまく会話の中に入ること

ができない。だから話し相手はいつも焔だけになってしまう。本当はみんなと仲良く話しないのに）

第０話　完全無欠自己中オタク登場（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。
どうですか？
ちゃんと改善されていますか？
面白くなっていますか？
読みやすかったですか？
誤字脱字は気になりましたか？
全体的におかしな場所はありませんでした。

もし何か感じるモノがあったら感想を書いてくれると嬉しいです。
一言でもかまいませんから――――何かありましたら――――気がねなく書いてくださいね。
ではこれで失礼します。
最後までお付き合いくださりありがとうございます。

第0．5話　堕ち神

教室前の廊下一面に貼られた萌えポスターを見て俺は、東京が萌えに侵食されいることを実感した。

二〇二八年（当時五歳）、奴等は何の前触れも無く現れ、分身とも言える神を結晶化させ喰らっていった。神を喰われた者は、心を無くし奴等に隷属した。

父も俺も神を信じてなかったから、結晶化されることなく助かった。

神を信じてない人が集まり（マッドサイエンティスト）、教会に反旗を起こした。

理由は至ってシンプルである、教会の生み出した神が災いの種だからである。

暴動が起きるなか父は教会から仕事を受け、奴等の正体を暴くために戦って死んだ。

父の死をいたんだ、多くの科学者が無念を晴らすために立ちあがってくれた。

そして個体数をだいぶ減らした奴等は人間に擬態し、人間社会にまぎれこんでいった。

しかし父は無駄死にしたわけじゃなかった、優秀な科学者達のおかえで、彼らが百％と萌えエネルギーで出来ていることと、萌えエネルギーに引き寄せられていることがわかった。教会は堕ち萌え神という命名し、一箇所に集めるために東京全土を萌え都市に作り変え、萌え神だけを信仰することを約束した。

さらに万全を期すため東京を出る者を無差別に殺す機械を設置して完全に隔離した。

「つばさ、そんな所に突っ立ってないで！　早く来い」

廊下にまで響く焔の声が聞こえて、急ぎ足で教室の中に入ると、窓際の方で制服の上に白衣を纏って気取った男が目に入った。他に生徒はいないようだ。自分の机に向かってカバンを取ろうとしたら、

唐突に話し掛けてきたので振り向いた。
「ちょっと相談したいことがある。人前じゃ言えない話なんだけど聞いてくれるか？」
「お前が俺に相談するなんて珍しいな、いつも偉そうなのに。で、どんな相談なんだ」
「教会の奴らに、堕ち神対策技術者としての誘いを受けた。近々堕ち神を根絶やし作戦が行なわれるため優秀な技術者を探しているらしい」
「確かにそれは人前で言える話じゃないな？　そんな重要なことを何故、俺に話した。しかも教会って？　統一宗教ことか」
「ああ、そうだ。そこで巫女をやっているイヴという少女について知りたい。
あとこれはチャンスだ、奴等を根絶やしにできる上に、心を無くした人達を救う方法がわかるかもしれない。なんせ教会の技術力は世界一だからな」
　この世界には人の数だけ神が存在している。九十年前の宗教統一戦争で、パンドラという女性が神を顕現させ、戦争を終わらせたと授業で習った。
　今もイヴという巫女が新しい生命が誕生たびに神を顕現させている。
　俺達には、神を顕現されていない、信仰心がないからだ。信じる気持ちが無ければ神は顕現されないみたいだ。それが異端視されるもう一つの理由だ。
　また、願いを叶える時のみ姿を現し、普段は身体の奥深くで眠っているらしい。
　人が死ぬと神も一緒に消滅するが一般的だが、神を喰らう神、堕ちた神というもの存在する。イヴが堕ち神を創りだしているという噂もあったが、教会は全面的に否定している。
なぜ、萌えという感情が堕ち神になりやすいのか、それは謎の多い感情だからだと教会の科学者は説明していて、イヴが関与している

ことは認めていない。
焔の両親は神に心を喰われ、奴等のしもべになった。
もし助ける方法があるなら、俺も協力したい。堕ち神だけでなく、神の存在自体を恨みながら生きてきた、それこそ、全ての神を殺したいぐらいに怨んでいる。だから焔の気持ちはわかるつもりだ。だが、教会の手は借りたくない。しかし、その技術には興味がある。
「それを知ってどうするつもりだ。まさか教会に手を貸すつもりか？」
「はぁ、なわけねえだろう。俺が宗教に力を貸すことなどありえない。潜入だよ、潜入。敵のアジトに潜り込み中から破壊工作をする。少し考えればわかるだろう」
子供を諭すように喋り出す、そのふてぶてしい態度がむかつきつつ、納得の笑みを浮かべて、頭を掻きながら情報を整理し、必要最低限のことだけを述べるように努める。
「わかった」
「わかったならとっとと教えろ」
焔はとても険しい顔をで注射器を向けって、全身から教えなかったら殺す的なアレを出して脅(おど)してくる。とても人にものを頼む態度じゃない、生唾を飲み込みながら、はきはきと喋りだす。
「知っていることを話そう、イヴの伝説は知っているよな。そのイヴの遺伝子元に創られたパンドラだ。パンドラ遺体の側で見つかったのがイヴだ。なぜイヴと呼ばれているかというと神を顕現させ、全て神を従えることができるからだ」
「一体どういうことだ、なぜ従える力も持っている。パンドラ以上のことができるというのか？　ちゃんと質問に答えろ」
注射器をしまい、襟元を掴んで詰め寄ってくる。慌てて答えるが今度は嫌味な感じで叫ぶ。コイツの態度にむかついてきたからだ。
「統一戦争後、パンドラは始まりの書を所持したまま姿をくらました。そしてイヴという少女が保護され、パンドラの遺体が見つかったのが十三年前。堕ち神が現れた時期と重なる。詳しいことは教会

の人間に訊かないとわからないけど。イヴは魔法術師で、パンドラが、自分の遺伝子を改良して生み出した者だから、全て神を支配することができた」
「その話が本当なら、イヴが堕ち神を創ったということになる。なぜ、そんなことをした。まさか教会を潰すためか？」
「ああ、そうだろう。魔法術師とは、本来秩序を破壊する存在だからな」
「魔法術師ね。まだ、そんなこと考えていたのか？　まあお前らしいか、でも俺は魔法術みたいなオカルト系は信じない。堕ち神の原因は科学的に調べるさ。
　でも、気になるなパンドラが教会を抜け出して遺体が見つかるまでの七十八年間の空白があるのか。
教会の教えを素直に信じるのは危険だ。パンドラという女の素性がわかっていない」
　どこか納得したような顔をして、襟元から手を離し、びしっとかっこつけて叫んできたのを聞いて、同類だと思った。

第1話　焔との賭け、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査。

「お前こそ、いつまで科学にこだわるきだよ。今は神を信仰する時代だぜ。お前も変わらないじゃないか、俺は科学よりも魔法術を信じているだよ」
「そうかもしれないな。俺は科学一筋でお前は魔法術の道を究めればいい。もう同じ道は歩けないのだから――――」
「俺とお前じゃ、目指すものが全然違うからな。道を違え、今は敵同士だが、いつか分かり合える、友達になれると思っている」
「そんなことはありえない、もっと現実を見ろよ。昔とは違うんだよ。萌えオタは大嫌いだ、俺は俺のことしか信じない。もう裏切られるはたくさんなんだ」
「まさか、黙って引っ越しちゃったことを怒っているのか、なら誤解だ。お前を裏切ったわけじゃない。仕方ないことだったんだ、信じてくれ」
「信じろ、何を信じろというのだ。何も知らないくせに調子のいいことばかり、お前を見えていると虫唾が走る。俺がどれだけ苦労して特待生なったかも知らないのに、偉そうにほざいてんじゃねえ」
「まあ俺達は、学校だけの関係で、立ち入った話しはしたことがないからな」
「学校以外の時間は全部研究に費やしている、馴れ合いは嫌いなんだ。それにオタ活動なってキモイことはやらない、萌えオタなんてみんな死んでしまえばいいだ」
「だから教会の誘いを受けるつもりなのか？　萌えオタを全滅させるために」
「ああ、そうだよ。俺は萌えオタが大嫌いなんだよ、見てるだけで吐き気がしてくる」
「お前のオタ嫌いは異常だ！　俺が居ないあいだ何がお前を変えたんだ、焔」

「てめえ、なぜオタをやっている。オタクがそんなに偉いか？　俺に指図できるほど」
「俺はただお前が心配なだけなんだ。幼い頃に命を救われたからな」
「俺の心配をする前に、自分の心配をしろよ。教会の大学に進学するんだて、でもてめえの学力じゃ、逆立ちしても無理だぜ。学年最下位のクズが」
「やってみなきゃわからないじゃないか？　俺の夢はやっぱりあの少女と再会すること。それを叶えるためには、大学での勉強は必須なんだよ、わかるか」
「すまん、全然理解できない。なんで名前も知らない少女のためにそこまでできる。
しかも、てめを裏切って捨てた女なんだろう。なぜ捜すんだ、復讐するためか」
「お前には一生わからないさ、彼女の気持ちなど。紙は助けてではなく、さようならと書かれていた。つまり自分から姿を消したんだ、俺を巻き込まないために、そう彼女は優しい子なんだよ。そんな彼女の側にいたいから俺は捜すんだよ」
「まさか……本気で言っているのか？　恋をしたというのか？　名も知らない少女に。理解不能な感情だ」
「だから言っただろう、お前には一生理解できないことだと。このマッドサイエンティストが」
「俺はいいだよ。マッドサイエンティストと呼ばれても、何かカッコいいじゃん。でもお前は違うだろう。夢ばかり見て現実と夢の区別もつかなくなった。救いようのないバカだろう」
「ちゃんと、現実と夢の区別くらいつけられる」
「てめえが出会ったという魔法術師も、どうせ妄想の産物だろう。現実を見ていない証拠だよ」
「あの子は確かに居たんだ、俺はしっかり覚えている。アレは、夢でも幻でも妄想でも無い。現実のできごとなんだ」
「だったそれを証明して見せろ、口だけなら何とでも言える。俺の

前にその魔法術師を連れて来い。まあ、所詮無理な話だ、諦めて自分の愚かさを認めろ。ふっははは」
「笑うんじゃない。あの子と再会するため俺は大学に行くと決めたんだ」
　コイツは科学しか信じない、イヤ信じられないだ。信仰心によって生み出された神は、人の心を喰らい願いを叶える異質な存在。願いを叶えるごとに人形になっていき、最後にはイヴに隷属する。そして焔の両親は願ってしまった。死んだ我が子を生き返らせて欲しいと、その代償に心を失った。焔は未熟児だったらしく、生まれて十日ほどで死んでしまった。だからどんな代償を払っても生き返らせたいという思いがあったのかもしれない。
　神の力は平等ではない、高位の神がいれば、低位の神もいる。
　高位の神を宿した人間だったならば結果が変わっていたのかもしれない。
そんな理不尽な理由で納得ができるわけがなく、俺達は教会を憎むようになったのかもしれない。
今は寮で生活をしているが、もうすぐ出ていかなければならない。
　だからコイツは神を信じない、けれど学年一位を常にキープしているから凄い。
　トラウマの一つや二つ、誰もが持っているものだ。
　いくら技術が発達して生活が楽になろうと宗教は無くならないのだから――――
「そこまで言い張るなら俺と賭けをしないか？　俺が勝ったら、助手になってもらう。てめえは馬鹿だが、手先は器用だし機械に強いからそこそこ役に立つ」
「ああ、いいだろう。俺が勝ったら魔法術の研究協力と大学への手まわしを頼みたい」
「ふっ！　いいぜ。勝負内容はアキバで行なわれているという萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査だ。期限は新学期までだ」

「それって今ネットで話題の魔法バトルネタか？　アキバでアニメのコスプレした、美少女達が世界の命運をかけて戦っているというアレか？　確か魔法少女シリアちゃんのコスプレをした参加者もいるという。超～俺好みのネタじゃないか？　その真偽を確かめてくればいいんだな」

「ああ、調査方法はお前に任せる。だが忘れるな、俺に下手な小細工は通用しないぞ。ふっははは」

コイツは何も変わっていない、児相で会った時のままだ。本当にコイツは不器用なんだよな。

俺が困っている時は助けてくれたし、今だって将来のことを真剣に考えてくれている。

たぶん……萌え萌え美少女だらけのコスプレバトル調査というのも、俺を諦めさせるためのものなんだろう？　情報元不明の怪しいものだ。調査には一週間も掛からないだろう。それ目で真相を確かめ、魔法術などはないということを証明したいのだろう。ほんと愚直な奴だ。

第2話　幼い頃の少女との出会いは初恋の味

なぜ俺がそこまで魔法術を妄信しているかというと？　それを語るには、幼い頃の不思議な体験を話さなければならない。

あれは伯父さんに引き取られることになり、焔と別れて三年が過ぎった冬。ぜんそくを患っていた俺は学校にも行かず、家で過ごすことが多かった。それを見兼ねた伯父さんは俺にこう言った。

「そんな軟弱な身体をしているから病気に負けるんだ。よし、わしが稽古をつけてやる」

無茶苦茶である、そんな家に居たら死ぬと思い逃げだしてきた。

行く場所もなく、帰ることもできなくて、近くにあった公園のブランコに座り無駄に時間を過ごしていると、どこからともなく綺麗な歌声が聞こえてきた。とても澄んだ歌声で思わず聞きいってしまう。心震える歌声に興味を持ち、声の主を捜してみることにした。

そして伝説のイヴと見間違うほど瓜二つな少女と出会ったのだ。たぶん初恋だったのかもしれない。言語眼（げんごがん）を用（もち）いてイヴの伝説を調べることにした。

言語眼とは音声が文字なって見えるうえに、どんな言語も読めるし、語源も理解することができる。

つまり、知らない、文字、単語、文法がないということだ。

一度読んだ書籍を記録・検索・再生することができる。

書物を読むことにだけ長けた力であり、他に何の使い道もない力である。

欠点は全て日本語になってしまうことと、数式など文法で表すのが難しいものは解析できないということ。つまり、式を解く能力は持っていない。

父から受け継いだこの能力を使えるのは俺と義妹の虹彩（アイリス）だけだ。

利点は、力の発動が簡単でリスクがないこと。発動時に目が光ることも紋章が浮かべあがることもない。黒い目のまま発動できるた

め、他人に勘づかれることはない。
そして驚愕の事実を知った、この世界とは別にもう一つ世界があること。次元の壁というものを超えた先に、魔法少女達が暮らす夢の世界がある。その世界ことをアルネシアと呼んでいる。
『貴方様を幾年も捜していました。桜さまから預かったこれを渡すために』
言語眼によって写しだされた文字を読めるだけで、会話をすることはできない。見るだけの能力だからな。
一冊の本を差し出してくる。表紙に何も書かれていない白い本だ。桜というの母の名前だったはずだ。この少女は母の知り合いなのか？　母のことはよく知らない、顔だて写真でしか見たことないし、父も死んだ母のことを全然話してくれなかった。いつも他人を信じるな、教会の神を信じるな、教会は敵だ。自分以外は敵だと思えと言っていたのに、教会の仕事を受けって死んだ。
『これは始まりの書。言語眼を持つあなたなら読み解く事ができるはずです』
押しつけてくる本を軽い気持ちで受け取り、本を開くと文字が光出し直接頭の中に入ってくる。頭が痛い、割れそうだと思い閉じると頭痛も治まった。
『どうやらまだ早過ぎたようですね。もう少し時が経てばきっと読み解けるようになるはずです。だって貴方様は言語眼の持ち主なのですから』
真っ直ぐな赤な瞳が心をざわつかせる。内に秘めた何かが彼女と共鳴しているようで身体が熱い、だが嫌な熱さじゃない。
少女の身体的特徴を簡潔に述べると、澄みきった日の白い雲なみたいな髪で、ふわふわと柔らかそうに靡いていた。一点の曇りも無い白磁の肌が人形だしさを強めていた。その肌よりさらに白いワンピースに白いスニーカ、そして黒い日傘を差していた。ワンピースはとても質素なもので彼女には不釣り合いだと思った。雪の精霊を思わせるくらいの神々しさがあったから――――

例え、会話できなくても、仲良くなるのには、さほど時間はかからなかった。
言葉を交わさないでもわかりあえてる気がした。
なぜ、そんな気がしたのか？　傍で笑っていてくれたから、ずっと一緒に居てくれたから、いつもいつも、公園にいた。約束もしていないに毎日毎日俺が来るのを待っていてくれた、それがとても嬉しかった。彼女は俺の深いところまで入り込んで来ていた。学校にも家にも居場所のない俺は、彼女と居るときだけが、安らげた。彼女も同じ気持ちだと思っていた。でも、そんなのは俺の勘違いだった。

事件が起こったのは、彼女と出会って二週間の後のとても寒い日だった。運悪く伯父さんに捕まってしまい、しごかれてしまった。伯父さんのモーションアイは、反則的な強さがあり、まず勝ち目はない。だって動きがすべて見切られるんだよ、これだから武闘派は嫌いなんだ。まだ身体中が痛むし、今日は寒いな！　吐く息が白くなり、雪もぱらついている。手袋にマフラー、使い捨てカイロと防寒装備でいつも公園に向かった。彼女に会うためだ、公園に到着した時にはうすらと雪が積っていた。雪の中で見る彼女はとても幻想的で、輝いていた。この世界に舞い降りた天使のようで、息をするのも忘れて見てしまうほど彼女は美しかった。
俺が来たことに気付き、ゆくりと歩いてくる。左胸辺りに手をあて、呪文のようなものを唱えると少女はうつむきながら
『貴方様の父親である一心様に堕ち神の調査をお願いしたのは私なの』
「キミは教会の人間なのか？」
しかし彼女は何も答えないまま、俺の前から姿を消した。言葉が通じていたのかも定かではない。ただ彼女はもうここに来ない気がした。

次の日。公園に来て見たが、やはり彼女の姿は無く、一枚の紙切れだけが残されていた。
スベリ台に貼られた紙には、汚い字で「さようなら」と書いてあった。
名前も知らない少女を捜す手段も無く、たっだ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。
彼女は一体何者だったのか？　本当に教会の関係者なのだろうか、わからない多過ぎた。
ただ一つだけ分かっていることわ。
彼女は魔法術師だったということだ。
彼女はぜんそくを治してくれた、彼女と別れてから一度も発作が起きていない。
しかし異性と付き合えない身体になってしまったのも事実である。
だからこの呪いを解くために魔法術のことを調べ始めた。
そして、まだ始まりの書を読むことはできない。もし読む解くことができたならこの呪いを解く方法がわかったかもしれない。それに始まりの書は、イヴに所縁（ゆかり）のあるものだから、彼女に会う方法もわかったかもしれない。
だから俺は魔法術の勉強を始めたのだ。彼女の言葉を信じて、早く始まりの書が読めるようになるために。

第3話　兵器少女との出会い

二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶された。堕ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。そして東京は七区に分け割れた。

十二月二十四日、恋人もいない俺は、萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査のために、今秋葉原にきています。
でも折角来たので、友達を誘ってエロゲー買ってから調査をすることになりました。
「じゃあな、つばさ」
「おお！　またな」
神中（かみなか）と白山（しらやま）と別れた俺の両手には、エロゲーショップで買った、大量のエロゲーが入った紙袋がある。もちろん本日発売したものだ。
二人とも、とあるオフ会で知り合った二次元信者で、とても気の合う友達です。

シャボン玉みたない薄い膜に守られた少女が突然姿を現した。
その現実離れした光景を見て、俺は確信した。アキバで何かが起こっているのは間違いない。興奮気味に身体を震わせ、思わずエロゲーの入った袋を落してしまう。気にせず数メートルに倒れている少女を凝視する。
「魔法少女シリアちゃんに似ているな。まるでアニメの世界から出てきたようだ」
自分を落ちつけるように、小さく小さく呟いた。
（しかしなぜ、全裸なんだ。噂ではコスプレした少女達が戦っているはずだ。どういった経緯で空から萌えキャラが降ってくるという状況になったのかはわからない）

あちこち怪我をしている、そうとう激しいバトルだったのだろう。
コイツを襲った犯人がまだ近くにいるかもしれないと思い経ち、辺りを見渡すが、人影はなく物音すらしない。薄気味悪い静けさに恐怖を感じずにはいられなかった。
気が付いた時には、人気のない公園に迷い込でいった。
確か白いワンピースに、黒い日傘を持った、小学生くらいの女子を追い掛けていたはずだ。どこか雰囲気が思い出の少女に似ていたから、思わず後を付けてしまったが、結局見失ってしまった、尾行に気付かれたのかもしれない。変質者だと思われたのだろう。探偵や刑事に向いていたいな。
――――よく考えたら、可笑しな話だ。あれからもう十年近くも経っているのに、姿が変わってなかった。まるで歳をとってないように見えた、そんなことありえないのに。
彼女を見失った場所に白い羽が何枚か落ちていた、これは天使の羽などではないのか？　そんなメルヘンチック考えながら歩いていたら、声が聞こえた。若い女性の澄んだ声だ。
辺りを見渡すが人影は無い、後ろの方から聞こえたように気がするに――――誰も居ない。
『貴方の助けを必要としている者がいます。資格を持つ者よ、始まりの書を開き呪文を唱えなさい』
エロゲーの入った袋を一旦地面に置き、リュックから始まりの書を取り出し読み始める。
『永久（とこしえ）に眠りし英知の結晶。我の呼びかけに答え、その姿を現せ』
その呪文に反応するように黄金色に輝き出す始まりの書。
どからともなく無色透明な膜に包まれた少女が現れ、始まりの書をリュックに戻し、エロゲーを拾い追い掛けたら、人気のない公園に迷い込んだというわけだ。
見れば見るほどシリアちゃんに似ているな、一分の一等身大フィギアみたいでお持ち帰りしたい気分になるぜ。
数メートル先に倒れている、シリアちゃんに瓜二つな女性は一体

何者のか、非常に気になる。溢れだす好奇心を抑えることができず、何だか少しワクワクしてきた。
非現実に足を踏み入れたと思う――――ライトノベルの主人公の気持ちが少しわかった気がした。
それと同時に危険な匂いがプンプンする、上手い話には毒ある。
これは罠ではないのかという気持ちが芽生えはじめていた。
裏があるはずだ、どう考えても可笑しいだろう。
関わったら大変なことになるぞ。
それでもいいのか俺、自問自答を繰り返す。
(ここで逃げたらヘタレだ。美少女を目の前して逃げるなど愚か者がすることだ)
何より胸が高鳴りを押さえることができなかった。
高校生活は、思っていたよりも普通で平凡で退屈なものだった。
家に帰ってマンガ・ラノベを読み、ゲームをやり、また学校に行く、それの繰り返しだ。
高校生になって変わったことは何一つ変わっていなかった。
バイトを始めたわけでもないし、彼女ができたわけでもない。
もうすぐ卒業するというのに中学生の頃と何にも変わってない。
成長していないだ。
それはなぜか。
勇気がなかったからだ。
一歩踏み出す勇気が――――
だから、このフラグを逃すわけにはいかないという気持ちで一杯になった。
しかし、現状何をすればいいのかわからない。
とりあえず、救急車を呼ぶべきだろか?
それとも人工呼吸……それ以前にまずは、呼吸をしているのかを確認するべきなのか?
こういう時にどうすればいいのか? いまいちわからない。
とりあえず少女に近寄り、片膝をつき、呼吸を確認する。

どうやら息はしてるし、目立って大きな怪我は無い。
（わかっていたことだが、近間で見るとやはり萌えキャラだ。空を切り取ったような青い髪に、閉じた目を覆う長い睫毛。顔のパーツはどれを取っても俺の理想とするもので、完璧といってもいい。まるで俺の頭の中を覗いて、それを具現化したそんな少女だ）
まあ、そんなことはありえないんだけね、頭の中を覗くとか。
しかしこのまま放置するわけにはいかないので、呼びかけてみることにした。
「おお、大丈夫ですか？　生きてますか？　何があったんですか」
反応はなかった。困ったな、どうするかなと、思案している時
「ここはどこ？　あなたは誰」
少女の声が聞こえ、思わず振り向いてしまった。
ビシューーーー
不覚にも、勢いよく鼻血が出てしまい、彼女にもかかってしまった、少し申し訳ない気持ちになる。
いかんいかん、まさか三次元相手にこんな約束な展開があるとは、油断した。
相手も凄く驚いている、しかし悲鳴をあげる様子はない。固まっているのか？
（いきなり知らない人が目の前にいって、鼻血をかけられば、普通驚くよな）
俺の心臓もバクバクで、あたふたとしてる。もう挙動不審で完全な変質者だ。
このままではまずいと思い経ちとりあえず血を拭こうとした。
彼女の白く滑らかな体を血で汚してしまったから、そう決断し、彼女の身体を直視する。艶めかしい、それでいて素朴な感じもあり、実体がまるで掴めないミステリアスな女性で直視したまま動けなくなる。
身体にこびりついた血を、指で拭って軽く舐めった、その妖艶で萌えるしぐさにドキとした。そして妖艶な笑みを浮かべて少女は

「この血は、お前のか？　感謝する」
（傷が治った！　一体何者なんだ、この少女は）
腰まで伸ばした、艶やかな光を醸し出すスカイブルーの髪で胸を隠していると言っても、貧乳だけどね。とても残念な胸で、くせ毛のない整った清純派に髪に、日焼けのない滑らかなので、生クリームのように白く柔らかそうな肌、全身から醸し出される甘い香りに魅了され、心奪われる。
大きく丸みを帯びたエメラルド・グリーンの瞳はネコみたいで可愛く、断然ネコ派の俺には好印象で、鼻と口は小さく、まさに萌えキャラと言った顔立ちだ。
十人中十人が萌えキャラと答えるだろう。
背は低く、百五十前後といった感じで、幼さない少女といったイメージの人形のように可愛い女の子である。
間違いなく日本人ではない、だが外人のそれとはまた違う、言葉ではうまく言い表せないが、彼女からは何か異質なモノを感じる。
本能的に関わるな、危険だと訴えている、警告して来るが、動けなかった。
彼女の目には力があり、その妖艶な体に魅了され、動くことができなくなほど美しい身体は、まさに二次元美少女以上の輝きがあった。
まあ萌えキャラだけどね。
両手で胸を触り目線を下げ、彼女は自分の体を見ると少し肌が赤くさくらもちみたいになる。小さくて可愛らしい胸を直視する、視線を外すことができない。
（三次元はクソゲーで、三次元女に興味のないこの俺が、目を離せなかった）
「きゃぁぁぁぁぁ」
今度は叫び声をあげた、だが心地よい叫び声だった。
どうやら自分が何も着ていないことに気が付いたらしい。
耳まで真っ赤に染め、恥ずかしくなったのか。踵を返し、逃げる

ように走り出した。
その背中に向けて、できるだけ紳士的に優しく叫ぶ
「ナイス――――恥じらい」
親指を立て締まりのない顔になりながら心の中で呟く。
(決してロリコンではない。思わず叫んでだけで、これはたぶんお約束なんだろう)
振り返って涙目で「ま……マント……生成」と叫び胸の前で祈るように手を合わせ、手全体が光り出してから少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、体に纏わりつきマントとニーソックスを形成した。
変身した。
それはまさに魔法少女の変身シーン。
このクソゲーな世界で、夢にまで見たもの。
魔法少女の変身シーンが見れるとは、それだけ生きてて良かったと思える。
もう思い残すことはない。
イヤ違うだろう俺、ここで終わっていいのか?
いいわけがない、確かに得体の知れない、危険な少女なのかもしれない。
でも、俺は「魔法少女が大好きなんだ」と腹の底から歓喜の声を上げ、ガッツポーズをとってしまった。
(だってリアルで魔法少女を見てしまったら叫ばずにはいられないでしょう。これもお約束だよ。このチャンスを逃すわけにはいかない。夢にまで見た非日常ライフが待っているんだから)
「私とした事が裸身を見られたぐらい動揺してしまったが……」
逃げるのを止め、振り返り叫んだ。
しかし、その顔はまだ赤く、声も少し震えているように感じた。
それがとても可愛く抱きしめたくなったがこらえて、俺は少女と目線を合わせるために屈んだ姿勢をとる。
「リアル魔法少女とか……マジ、俺の予想(スペック)を超えてるぜ!　ついに

俺様の時代がきた――――」
「いいか、繰り返し言うが、血の提供痛み入る」
あまりない胸を張り、右手を腰にをあて、左手を突き出し、勢いよく叫ぶが届かない。俺はしゃがんだまま一方的にわめき続ける。もはや会話など存在しない。
「オタクが夢を見る時代は終わらない、エロは世界を救う！　魔法少女最高」
「人の話を聞けっ」
腕を左右に振りオーバアクションで叫ぶも、聞く耳を持ったない。自分の言いたいことだけをひたすら語る、相手の話はまったく聞かないで押しつけがましく、まさに自己中と言った感じだった。
魔法少女に会えたことがあまりにもうれしくて熱くなり過ぎていた。
「よし大丈夫だ、全て任せろ――――で、その下はまだ何も着けてないのか？」
（言った後に激しく後悔した。でも、だって気になるじゃないか）
ゆでダコのように頬を赤く染め、目を見開きビックリした表情が、また萌える。
もうホント可愛いな、お持ち帰りしたいくだいだよ、マジで。
貧乳好きの俺としてはたまらないな、ほっそりとしたスレンダーな身体わ。
「ええい、もういい。ココはどこだ」
そのしぐさ、表情、全てが可愛くて、俺は思わず脱ぎ出していた。
これが妖しの術か？　何て恐ろしい術だ。
魔法少女を目の前にして興奮を抑えることができなかっのかもしれない。
「この変態！　人の話を聞け。コミニケーション能力ゼロか、それとも上手く言語が翻訳されていないのか」
目線を下ろして不敵な笑みを作り、蔑むように、憐れむように見つめてくる。とりあえず服を着るか、寒いからな。自制心は大切だ

よな、やり過ぎるとひかれるからな。少し自重してちゃんと相手の話を聞くか、それがいいな。これ以上怒らすのは得策じゃない。
「うん、大丈夫。ちゃんと聞こえてるよ、でキミは何者？」
「よくぞ、聞いてくれた、わたしは兵器だ」
「……」
「――――兵器」
「うむ、そうだ」
どこをどう見ても、萌えキャラである。しかも俺好みの萌えキャラだ。
「こ……っこらっ！　だからジロジロ見るのをやめろ」
耳まで赤く染めて、何とも頼りない紺色マントをしっかり掴み胸を隠し、足を固く閉じているが――黒いニーソックスが眩しい。今の姿からは異質な物は感じない。気の所為だっただろうか？　まあ、可愛いからどうでもいいや。
「最初は堂々と見せていたじゃないか」
「それは確かにそうだが、なんか貴様に見られるのはイヤなんだよ」
何かを思い出したようにいきなり辺りを見回す。
「教会からの追っ手が！　近くにいるはずだ」
手にマントが引っかかり下半身が露になるが、本人は気がついていないみたいだ。
危機迫る感じで公園を見回しているが、人の気配は全く感じない。
これだけ叫んでいるのに誰も来ない可笑しいのかもしれないが――――美少女が突然現れる何ていう、『王道展開』にあったせいで、驚く気にはなれない
しかしというか、やはりというか、下は何も入っていないんだ。
つまりノーパンだったなどという、いやらしいことを考える余裕はあった。
「どうやら近くに敵はいないみたいだな。貴様に一つ教えておきたいことがある。この身体のことだ」
「改まってどうした」

「大人しく聴け」
「ああ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2184w/

孤独な兵器少女と変態で幼女好きな俺

2011年10月28日10時11分発行